

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370084

研究課題名(和文)近代への過渡期の民衆道徳における「孝」の展開と都市住民の実態

研究課題名(英文)The development of filial piety in morality thought and the actual situation of urban families in the period of the transition to the modern times

研究代表者

早川 雅子 (HAYAKAWA, Masako)

目白大学・社会学部・教授

研究者番号：70212305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：江戸町方人別帳、及び文献解釈によって、近代への過渡期における道徳(孝)と都市家族の実態を解明した。核家族が50%超を占め、江戸で家族を形成し、町々を移動しながら定着していた。道徳意識は、自分の家族世帯に対する愛着を特徴とする。親子間の情愛は、家族の紐帯となるが、孝養と養育を通して形成、確認される。孝は、家族による自己完結的な家族構成員の管理、そのための主体的自助努力を本質とする。

研究成果の概要(英文)：Analyzing records of population census carried out in the Edo period (Nimbetsucho) and literature, we clarified the actual situation of urban families and morality (filial piety) in the period of the transition to the modern times. Nuclear families, which exceed 50% of the whole, were staying as families in the Edo moving from town to town. Moral (filial piety) consciousness is characterized by an attachment to his/her household. Compassion between parents and children, which is a close bond of families, had been formed and confirmed through filial support and bringing-up. Essence of filial piety was self-conclusive management of family members, and independent self-help to achieve it.

研究分野：思想史

キーワード：民衆道徳 孝 貝原益軒 中江藤樹 人別帳 四谷塩町一丁目 麹町十二丁目 四谷伝馬町新一丁目

## 1. 研究開始当初の背景

(1)近代への過渡期とは、1700年代末から幕末維新时期までの期間をいう。この時期の民衆道徳における第一義的徳目は、孝である。民衆の孝の特徴は、親子の連続性を根拠とする情緒的な道徳という点にある。存立の原理を自覚することに始まる儒学の孝は、実践すべき自明の本性へと変容する。これを儒学の民衆化と捉えることができる。

(2)幕末維新时期の江戸町方人別帳データベース分析によれば、都市住民の標準的家族形態は、夫婦と未婚の子供たちからなる核家族である。親と同居して孝養を尽くすという形で孝を実践する世帯は限定的である。都市家族の現実は、孝の内容が世帯構成や社会階層によって異なることを示唆する。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、孝道徳の展開という観点から、儒学の民衆化の過程とその要因を解明することにある。方法として、(1)文献解釈を中心とした思想史的方法、(2)人別帳データベースを史料とした都市住民の実態分析という実証的方法の二点を設定、相互補完させる。成果を総括して、都市生活者が都市を生き抜くために講じた戦略的意図という観点から、民衆における孝を再定義する。

(1)思想史的方法では、① 近世前半の儒学において、孝を人間の本性と定め、報恩の義務を負うことになる論理構造を明確にする。② 1700年代以降の民衆道徳を対象にして、①で把握した論理構造の展開過程を追究する。

(2)実証的方法では、① 世帯構造、家族形態、社会的階層分化の状況等に注目して都市住民の実態を解明する。② 江戸定着状況、家族形態移行、世代継承例などの分析を通して、孝行の具体的諸形態を開示する。③ ①②を総合して、孝イデオロギーの現実性を検証する。

## 3. 研究の方法

(1)思想史的方法 ① 日本儒学において孝、恩の論理を構築、その教説が普及した中江藤樹と貝原益軒を対象に設定する。藤樹の太虚、益軒の理気一体論を取り上げ、人間の存在構造と報恩観念を導き出す論理を明示する。報恩を自らに課す義務に昇華させる概念装置として、「天地の子」意識を取り上げ、その概念構造と意義を考察する。② 民衆道徳では、1800年前後の教訓書を資料にして、人間存立の本源、報恩の論理、「天地の子」意識の変容を追究する。

(2)実証的方法 ①-1 世帯の居住階層・職業・居住年数・家族構成を抽出、町屋敷に配置するという方法で、町屋敷ごとに世帯構造を復元し、その特徴を考察する。

①-2 ハメル-ラスレット分類法(H-L分類法)によって家族形態を分類し、世帯構成を考察する。

①-3 社会的階層の分化の検証基準として、居住階層・職業・居住期間(移動頻度)の三点を設定する。

②-1 世代継承、世帯構成、移動頻度の観点から、江戸定着パターンを類型化、定着状況を実証的に解明する。

②-2 家族形態移行分析、及び世代継承の事例を検証し、世代継承戦略と直系家族世帯の実態を明らかにする。

③ ①②を総合して、孝イデオロギーの現実性を検証する。

#### 4. 研究の成果

(1)① 儒家における孝論では、人間がこの世界に存立させてもらう恵みを恩と規定する。孝の本質は恩に報いる行為、生を通して存立の本源につかえる行為である。孝の内容は人間存立の本源を何に求めるかによって二つに分かれる。第一は、人間の誕生の事実を存立の本源と定める論理で、中江藤樹を嚆矢とする。恩とは父母による分娩と養育を指し、父母につかえて日々生きることが孝である。第二は、天地による万物生成の働きを本源とする論理で、貝原益軒が朱子学的理気論を援用して構築した。天地の恩に報いるという意味で、孝は社会生活全般にわたる規律遵守にまで拡大する。儒家の孝論の特徴は、存在論を基礎にして構築される点にある。藤樹の孝は、宇宙の全体構造・図式、図式に則り働く宇宙の根源・太虚、太虚から派生する個別具体的物体、具体的物体から構成される宇宙全体を包摂する概念である。

「天地の子」意識とは、自らの存在構造を天地の派生体と捉える意識である。藤樹と益軒は、人間を「天地の子」と位置づける。「天地の子」意識は、自らが打ち立てた世界観に基づいて世界のなかに自らを定位した上で、日常行為の工夫を重ねることを通して生まれる。人間は、思索と行為を重ねることによって、自身の力で「天地の子」

になるのである。その意味で、「天地の子」の生＝孝行は、自らに課した義務であり、かつ主体的自律的な営みである。「天地の子」意識は、社会における自己の存在意義に対する真摯な問い掛けを契機とし、社会の構成員としての自覚を促す。

② 1800年前後、民衆の主体的学習意欲が向上、道徳の大衆化が始まる。

往来物や教訓書の刊行は隆盛に向かう。民衆向け教訓書は、平易な言葉で日常道徳を説く。しかし、貝原益軒『益軒十訓』などの儒学系教訓書を除き、人間の本源に関する思索が説かれることは少ない。

「天地の子」論においては、人間が「天地の子」である根拠が存在論に基づいて説明されない。天地は万物の生育を助けるという理由のみで、無条件に万物の上位に位置する。共に天地を戴く者として、人間はみな生まれながらにして「天地の子」なのである。この点、儒家の「天地の子」意識と決定的に異なる。

孝行のモチベーションとして、父母の子として生きている事実が強調される。分娩と養育にあたり施された恩が、孝行を促す根拠である。この思考は、中江藤樹の恩論を継承したともいえるが、宇宙の存在構造に関する思索はみられない。恩の論拠は、親と子の繋がりのみにおかれる。親と子を繋ぐ血縁、互い交わされる深い情愛が、親の恵みが生じ、子が恩に報わんとする動因である。孝は、恩の体認自覚を契機にして為すべき義務と化す。

恩の論拠を親子の繋がりによって設定したことによって、孝の内容は、父母の養

育、家業精進、家の存続、家族の安泰など、私的内容に収斂する。

民衆道徳の大衆化のなかで、天地と人間との連続性は、生得的賦与の特性と説かれるようになる。民衆は、社会との連続性を論理的に了解しないまま、優れた「天地の子」として生きねばならず、自らの力で自分なりの世界観を構築することは難しい。

民衆道徳における孝は、儒学の孝の概念や用語を取捨選択して編成したものが多く、平易に説き明かす工夫のなかで意味の変容も生じた。儒学の民衆化を、思想的方法のみによって、儒学の展開として体系的に検証することは困難だといえる。

(2)①-1 四谷地区三町とは、四谷塩町一丁目(新宿区本塩町1~4)、麴町十二丁目(新宿区四谷1丁目19~24)、四谷伝馬町新一丁目(新宿区四谷2丁目4、8)である。四谷地区三町人別帳全19本をデータベース化、基本的分析を完了した。1865年の世帯構造から、三町の特徴を指摘する。

【表1】は、1865年4月時点の人口・世帯数一覧表である。塩町一丁目と伝馬町新一丁目の二町の住民世帯

	塩町1	麴町12	伝馬町新1
人口	567	580	379
世帯数	135	144	96
居住階層別世帯数 単位(世帯)			
家持	4	4	1
家守	13	6	11
地借	41	71	29
上中階層	58(43%)	81(56%)	41(44%)
店借	77	63	52
下層	77(57%)	63(44%)	52(56%)
記載なし			3

構成、及び比率はほぼ等しい。下層世帯の比率が6割弱を占めるは、地借世帯3割と相対的に少ないからである。麴町十二丁目は、70世帯超の地借世帯が上中階層の構成比を上げている。

【表2】では、1865年4月における名前人の職業を職種別に分類、集計した。塩町一丁目は、「職人」の構成比が高く、「雑業の部」の構成

	塩町1	麴町12	伝馬町新1
記載なし		1	7
宿・陸間屋	2	3	
商売	3	50	7
渡世	35	9	40
職人	46	38	22
〇〇売・稼・棒手振	4	17	6
人足・車力・露	3	3	4
日雇稼	29	15	7
賃仕事	9	4	2
按摩・雑業	3	2	1
人足請負		1	
医者	1		
書役		1	
総計	135	144	96
業種別(商業・工業・雑業)構成比 単位(%)			
	塩町1	麴町12	伝馬町新1
商の部	28.1	43.8	49.0
工の部	34.1	26.4	22.9
雑業の部	37.8	29.8	28.1

比はそれを凌ぐ。職人や住まいを仕事場にする者、あるいは其日稼ぎの人にとって適した町である。

麴町十二丁目と伝馬町新一丁目は、商売の町である。相違点は、商業従事世帯の社会的階層である。麴町十二丁目では上中階層が大半であるのに対し、四谷伝馬町新一丁目では店借が約4割に上る。この相違は、経営形態に原因する。麴町十二丁目は、常設店舗が中心であるが、伝馬町新一丁目では、振り売り方式の零細な経営規模が相当数を占める。

①-2 【表3】は、1865年4月在住世帯の家族形態を、H-L分類法で分類、世帯数と構成比を集計した表である。

家族形態の構成比率では、町ごとの相違が認められる。麴町十二丁目は、〔類型4〕〔類型5〕の二世帯同居世帯の構成比率が高い。上中階層における二世帯同居世帯は、商売など定期的な高収入を見込める職業が多い。家の継承、親の孝養などの孝を実践できる世帯である。

	四谷塩1		麴町12		伝馬町新1	
	世帯数	比率	世帯数	比率	世帯数	比率
1	14	10.4%	20	13.9%	10	10.4%
1a	3	2.2%	4	2.8%	1	1.0%
1b	11	8.1%	16	11.1%	9	9.4%
2	3	2.2%	4	2.8%	3	3.1%
2a	2	1.5%	2	1.4%	1	1.0%
2b	1	0.7%	2	1.4%	2	2.1%
3	70	51.9%	68	47.2%	64	66.7%
3a	12	8.9%	9	6.3%	8	8.3%
3b	38	28.1%	42	29.2%	48	50.0%
3c	6	4.4%	7	4.9%	5	5.2%
3d	14	10.4%	10	6.9%	3	3.1%
4	29	21.6%	27	18.8%	14	14.6%
4a	10	7.4%	11	7.6%	9	9.4%
4b	3	2.2%	1	0.7%		0.0%
4c	13	9.6%	9	6.3%	4	4.2%
4d	3	2.2%	4	2.8%		0.0%
4e			1	0.7%	1	1.0%
5	17	12.6%	24	16.7%	5	5.2%
5a	8	5.9%	7	4.9%	2	2.1%
5b	6	4.4%	8	5.6%	2	2.1%
5c	2	1.5%	8	5.6%	1	1.0%
5d						
5e	1	0.7%	2	1.4%		0.0%
6	2	1.5%	1	0.7%		0.0%
計	135	100.0%	144	100.0%	96	100.0%

伝馬町新一丁目は、単純家族世帯の比率が65%を超える一方で、二世帯同居世帯の比率は三町のうち最も低い。小規模零細な商業世帯が小商いによって生活基盤を固め、生活を維持するのに適した町柄だといえる。世代継承を果たし、二世帯同居世帯を継続したのは、養子夫婦を迎えた一世帯のみである。伝馬町新一丁目住民世帯においては、自らの世帯を維持するのが世一杯であり、親子が同居して親に孝養を尽くすという形での孝の実現は、きわめて困難であったといえる。

【表4】 麴町十二丁目 町屋敷別 階層・職業 単位(世帯)

階層	職業	町屋敷番号																									計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
家守	なし																										1
	家賃		1										1			1											2
	人足兼・船																						1				1
地借	運輸																				1						1
	家賃																										3
	職人																										2
地借	純農																				1						1
	兼力																										1
	兼仕事																										1
	運輸																										1
	家賃	2	3		2	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1	1	3		2	2	2	4
	渡世	1			1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1	1	1		1	1	1	7
	職人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17
	人足兼・船																										1
	純農	1	1	1	1	1	2	2						3		2	4										16
地借	兼力																										1
	兼仕事	1	1																								2
	日暮終																										1
	兼手廻																										2
	運輸																										1
地借	家賃																										2
	渡世																										5
	書記																										1
	職人																										1
	計	4	7	1	16	3	12	9	6	9	3	1	1	17	1	1	6	12	6	6	1	1	1	5	7	2	144

①-3 【表4】は、麴町十二丁目住民世帯の居住階層と職種を重ね、町屋敷ごとに分類、集計した表である。

職業と居住階層には相関関係がある。職業の категория は、二つに大別される。一つは、継続居住と経済力を形成する正業であり、居住階層は上中階層に集中する。もう一つは、其日稼ぎが中心で、財産を築く余地がない職種であり、下層に集中する。

町内における社会的階層の分化は、三点にわたって指摘できる。第一は、町屋敷ごとの階層分化である。上中下層が集中する町屋敷(1・5・10・16・22など)、下層が過半を占める町屋敷(3・6・13など)と対照的な町屋敷が

混在する。第二は、町屋敷内部における上中階層と下層との分化である。町屋敷4・6・13などでは、店借半数以上を占める一方、地借と家守は長期居住世帯である。第三は、同一階層間における分化である。

②江戸定着を、二世帯以上にわたり江戸の地に居を構え、江戸の地を生活の場とする、と定義する。麴町十二丁目1865年在住144世帯のうち江戸定着条件を満たすのは107世帯である。

江戸定着は二つのパターンがある。

〔パターンⅠ:江戸定住型〕:一つの町に定住して、家職・家産・家名の統体である家を構築、家の継承を果たすパターンである。この家は、次世代へ引き渡す物質的継承財という性質において、近世的な家の伝統を継承する。

〔パターンⅡ:江戸居所型〕:一定の範囲内を移動しながら、江戸という地域に生活の場を固めるパターンである。この家は、夫婦掛向いで切り回し子供を育てていく場で、家族の落ち着きどころという意義がある。

パターンⅡは、移動の頻度、居住期間によって二つのタイプに分かれる。

〔パターンⅡ-①:江戸居所型(長期居住)〕:一定の場所に比較的長期間居住し、江戸定住型を志向する。

〔パターンⅡ-②:江戸居所型(短期流動)〕:より稼ぎの高い職場を求めて、頻繁に移動を繰り返す。

〔パターンⅠ:江戸定住型〕の実数を、1)名前人が麴町十二丁目に生まれ、2)物質的継承財、3)家継承の象徴である名称襲名の3点の指標を立て検証した。江戸定住型は6世帯、江戸定着107世帯の僅か6%弱に限られる。

江戸定着状況検討結果から、孝の具体的形態を読取ることができる。江戸定住型、江戸居所型（長期居住）は、家業精進、家の存続という孝を実現している。一方、江戸居所型（短期流動）は、江戸の地で生き抜くための行き方が最重要課題であり、江戸生存戦略をもって孝と捉えることができる。

③ 孝イデオロギーの典型は、父母の孝養、家業精進と家の継承である。単純家族世帯の実態から、その現実性を検証した。労働市場を求めて繰り返す移動、単純労働による低賃金、継承財がない、子ども世代への不十分な教育などは相関し経済的理由に集約される。単純家族世帯再生産の要因の一つは、経済的要因である。単純家族世帯の実態から、孝イデオロギー実現が限定的と論定できる。

江戸町方住民の実態を検討した結果、孝は家の継承存続や親の孝養だけにとどまらないことを実証した。近代への過渡期における孝は、都市生活者が自助により家族とともに生活する居所を築き、将来を見通して子どもを育て上げ、都市を生き抜くための行き方の総体だといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

① 早川雅子、江戸町方人別帳データベース-設計と活用-、目白大学総合科学研究10号、査読有、2014、p.41-53

② 早川雅子、近世後期における民衆の孝徳の源流をめぐって、目白大学人文学研究10号、査読有、2014、p.1-13

③ 早川雅子、孝における報恩の論理とその展開、目白大学人文学研究11号、査読有、2015、p.17-35

④ 早川雅子、麹町十二丁目における社会的階層の分化と江戸定着の状況、目白大学人文学研究12号、査読有、2016、p.43-62

⑤ 早川雅子、幕末維新期の江戸における家族世帯の構造、目白大学総合科学研究12号、査読有、2016、p.19-34

⑥ 早川雅子、幕末維新期の江戸町方住民における孝の諸相に関する一考察、目白大学人文学研究13号、査読有、2017、p.85-105

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

早川 雅子 (HAYAKAWA Masako)

目白大学・社会学部・教授

研究者番号:70212305